

菊地利夫先生を偲ぶ

本学会の設立と発展に中心的役割を果たされた菊地利夫先生が、2011年10月30日呼吸不全で亡くなられた。享年95歳であった。先生は、1916（大正5）年岩手県一関にお生まれになった。北海道名寄中学、東京高等師範学校をへて、1942（昭和17）年に東京文理科大学理学部地理学専攻を卒業。卒業後海軍予備学生として入隊し、海軍大尉を経て、1946年に終戦により復員。同年に千葉県市川市立国府台高校教諭、翌1947年に千葉師範学校（1950年以降千葉大学教育学部）助教授となり、千葉における長いキャリアのスタートをきられた。1957年に理学博士を取得、1962年に同大学教授。1976年には筑波大学歴史・人類学系に配置換えとなり、創設期の筑波大学、とりわけ歴史地理学専攻コースの開設と運営を通して、その基礎固めと整備に尽力された。筑波大学定年退職後は、流通経済大学教授として、私学教育にも寄与されている。

菊地先生の研究活動は、実に多彩である。しかし、先生のお名前を不朽にしているのは、第一に多年にわたる全国的な現地調査、自ら掘り出された地方文書の検討を基礎とする新田開発に関する研究によってであろう。それらの一連の研究は、『新田開発』（1957年、改訂増補版1977年、古今書院）と『続・新田開発 事例編』（1986年、古今書院）で代表されるが、通時的かつ共時的な全国的展望のもとに新田開発の類型や時期的差異を明らかにし、新田開発と自然的条件・開発の技術水準、あるいは地域社会や商品作物生産や社会階層などとの関連に言及したもので、それによって従来個別的にすぎなかった新田に関する研究水準を一挙に向上させた¹⁾。今日でも、日本村落史や地域史などの分野で引用されることが少なくない。

大きな反響を及ぼした先生のもう1つの研究部門は、歴史地理学の本質、目的および研究方法に関する理論的究明であった。1977年に、その集大成ともいべき『歴史地理学方法論』（新訂版1987年、大明堂）が公にされている。この研究では内外の関係する諸論考のみならず、隣接諸分野の基礎概念やその変遷を幅広く渉猟し、空間知覚や空間組織に対する内面的考察や時空連続型考察法の重要性などを指摘しつつ、歴史地理学の立場を宣揚された。この研究は実に多面的で先駆的であり、筆者にとって必ずしも理解しやすいものではないが、歴史地理学研究の大きな礎石となったことは間違いない。その影響は、中国における歴史地理学にも及んだ²⁾。

菊地先生は歴史地理学の研究者として傑出した存在でおられたため、後続する私どもに意外に知られていないが、千葉大学在職中には歴史地理学を含む人文地理学の教育に携わる一方、社会科地理教育に関する提言やその実証をめざした地誌学的調査研究を数多く発表されている。たとえば、『地理学習の原理と方法』（1960年、金子書房）、『地誌学習の改造と基本的指導事項』（1968年、明治図書）、あるいは『房総半島』（1959年、古今書院）、『東京湾史』（1974年、大日本図書）などである。後の『日本歴史地理概説』（1984年、古今書院）は、これらの延長上にある作品とみることもできよう。

先生はまた文部省のほかに、科学技術庁や林野庁などの中央政府、ならびに千葉県でもさまざまな審議委員をつとめ、行政計画の立案に多くの提言をしてこられた。著作目録でそれらしいものを数えただけでも、50編以上になる³⁾。かつては今日に比べて、知的集団としての大学の評価が高かったとはいえ、こ

れだけ多くの仕事に携わられたことは、能力はもちろんのこと、誠実なお人柄への信用が大きく与っていたものと思われる。

菊地先生の業績としてもう一つ触れておかねばならないことは、学会の創設や発展への寄与である。日本歴史地理学研究会と称する本学会の前身が発足したのは、1958年であった。先生の言によれば、その設立の契機は、第二次世界大戦後に世界の学問の著しい進歩を目の当たりにして日本の地理学の現状をみると、とくに歴史地理学をめぐる環境は世代交代などもあって悪化しており、とくに関東では関心が薄いこともあって、同好の士と大同団結して歴史地理学を発展させたいという願いがあった⁴⁾。当初、研究会と称していたことは、いつ頓挫するかもしれないという危機感からであったという。中田栄一先生などのご協力もあって次第に軌道に乗り、やっと1966年から歴史地理学会と名乗るようになった。学会成立後には、先生はむしろ裏方に徹しておられたが、1978～1981年度にかけて会長職を務められている。千葉県では、千葉地理学会が活発に活動してきたが、菊地先生はその設立や発展にも大きく関わられた。このような多方面でのご活躍が評価されて、1987年には勲三等旭日中綬章を受賞されている。

私が先生と親しく話をさせていただくようになったのは、筑波大学内で私が歴史・人類学系に移籍した後のことであった。とりわけ私の場合、先生がどのようなお考えで歴史地理学コースをつくられ、運営されてきたのか

を理解する必要がある、1年に1、2度お宅にお邪魔して話をうかがうのを楽しみにしてきた。これだけ多くの仕事をこなされてきた先生は、ご自分には大変厳しかったはずであるが、研究の進展や学会創設などで発揮された芯の強さや辣腕ぶりはつゆほどもみせられず、絶えず温顔で、東北人らしく慎み深いお人柄が印象的であった。先生は実に筆まめであり、折々にいただいた小さな字がびっしり詰まったはがきは私の宝物である。ここ数年、お会いすると「長生きしすぎて恥ずかしい」とおっしゃるのが口癖であったが、その笑顔がもう見られないと思うと、時の無情に嘆息せざるをえない。菊地先生、長期に及ぶご指導、ありがとうございました。合掌

(石井英也)

〔注〕

- 1) 黒崎千晴「菊地利夫教授と歴史地理学」歴史人類(筑波大学歴史・人類学系)9, 1980, 5-20頁。
- 2) 菊地利夫「北京大学大学院における講義と中国の歴史地理学の現状」歴史地理学174(第37-3), 1995, 23-33頁。
- 3) 前掲1) 16-20頁。
- 4) 歴史地理学239(2008)は、歴史地理学会50周年記念誌で、設立や初期の発展に関わった多くの先生方が、その当時の様相を述べられている。とくに菊地先生のお話は、「日本歴史地理学研究会創設のころ」(9-11頁)と題して設立の経緯や、ご自身のご苦労などについてふれられている。